# 夢はでっかく全国展開、かなぁ

ヘイハチロウ＝忠カチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢はでっかく全国展開、かなぁ

【Ｎコード】
Ｎ００２２Ｕ

【作者名】
ヘイハチロウ＝忠カチ

【あらすじ】
俺は事故で死んでしまった。しかし、それは神様の間違えだった。生き返らせろって文句を言ったら、ものすごい笑顔で【ムリ】と言われ、殺そうと思った
でも、転生ならＯＫって言われたのでやってもらうことにした
大丈夫かなぁ・・・・・・

## 新転地

ＳＩＤＥ：？？？

「ここが陳留かぁ、結構賑わってんなぁ。」

大型の屋台を引きながら、大通りを歩いて行く

人々は笑い、品物も豊富。商売にはもってこい環境だ、久々の腕の見せ所だな

今思えば今までの場所は酷かった・・・・・・
袁紹のとこは、人がコネェコネェ、たった一週間で断念。まぁ、何人かの武官、文官と知り合えたからいいけど
袁術のとこは、とにかく物価がたけぇたけぇ、三日ともたなかったよ。上物の蜂蜜が手に入ったのが唯一よかったことかなぁ

まぁ、いずれにしよ金にならなかった。・・・・・・・・・・・・・・・・・最悪だよ

「意外と良い場所ゲットしたな。人の目にも付きやすいし、大通りも近い、サイコーだな
さぁ、開店開店！　意らしゃーい！！、いらしゃーい！！」

さっきまで咥えてた煙管の火を消し、呼び込みを始める

此処から始まる、俺の新生活。楽しく出来たら良いなぁ

## 新転地（後書き）

主人公；姓・臧　名・覇　字・宣高　真名：軍侍（グンジ）

旧姓：結城　軍侍

特技；料理　野菜の皮剥き　日曜大工　武術を少々　薬術

好きなもの：残さず食べる奴　包丁　煙管

嫌いなもの：出した飯を残す奴（事情による）

駄文ながらも宜しくお願いします

## 夏、迫る

ＳＩＤＥ：軍侍

皿を洗い、包丁を磨き整える
やっぱり良い包丁だ、さすが神様。なんでも天界でも有名な刀匠に頼んでくれたらしい
言ってみるもんだ

「やってるかい？」

「へい、　いらっしゃい！！　どうぞ」

客を誘導し、お茶、お絞りを渡す。最初はお絞りの説明もめんどくさかったなぁ

「何にしましょう？」

ウチのメニューは、・飯　・漬物の盛り合わせ　・汁物　・酒　・野菜の盛り合わせ　のみ

後は・・・・・・・

「今日は、チャーハンと野菜炒めにしようかな」

「ハイ、よろこんでー！！　　　どうぞ、突き出しです」

というと、小鉢に乗った漬物を出す　　　　※因み
に今日は茄子の浅漬け
客にリクエストを聞いて、作れるなら作る（まぁ、大体作れるんだ
けど）

「おっ、今日はアタリだね」
気に入ってくれてるようだ、うれしいねぇ

「そいつは、なによりで」

そう会話をしながら、注文の品を作っていく。

「ごちそうさまでしたー、また来るよ」

「ありがとございました。またいらしてください」
客が笑顔で帰っていく。いいねぇ、冥利につきるたぁこの瞬間だねぇ
すぐに机の掃除と皿洗いを済まし終えると、相棒を口に咥え、火を
つける
…………………………………………………
…………………………………………………
旨いねェ

開店からかれこれ一刻ほどたったとき、それは突然やってきた

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ：？？？

わたしは今非常に悩んでいる。とゆうのも、我が主のことで困った事になっているのだ

「はぁ、華淋様が最近元気がない。どうしたものか」

今思うと当然と言えば当然である。というのも、領地を任せられてから多忙も多忙。とても休んではいられない

しかし、御身の事も考えて欲しい

「ええい！何も思いつｋ『グーー』っう・・・・・、とりあえず何かたべよう、腹が減っていたら思いつくものも思いつかん」

食べる所を探し始める、すると・・・・・

「将軍、何かお探しですか？」

警邏をしていた兵が近付いてきた

「昼食をとろうと思うのだが、良い場所はないか？」

「それなら良い所がありますよ」

わたしは教えてもらった場所に向かった

ＳＩＤＥ：軍侍

煙管を吸い終わり、包丁を磨いていると・・・・・・

「おい、たのもう！」

「へ？」

それが彼女たちとの出会いであった

ストレスの原因になるとも知らずに

## 夏、迫る（後書き）

反省会

はい、２話目ですめ

わざわざ？？？にする必要なるのかとおもいますが、一応ということで　はい
女性のしゃべり方ってむずかしいですね

今回出てきた、食べ物は『漬物』ですね

おいしいですよね漬物。市販で買うと当たり外れがありますけど、
自分で作ると愛着があっていいですよね

自分浅漬けもいいけど、柴漬けもサイコーですね。細かく刻んで、
漬け汁と一緒にタマゴかけご飯にかけると、もう絶品ですね

みなさんはどうですか？

でわ３話目でまたお会いしましょう

**さらに、夏、迫る**

ＳＩＤＥ：軍侍

な、な、何だぁ？　少しばかりあっけにとられたが、ふと我に返って

「たのもうって、お客さん。　決闘しにきたんじゃ無いんですから」

「おおっ、そうだな。すまん」

「いえいえ、とんでもない。　で、お食事ですか？」

「あたりまえだ。屋台に来て、飯を食べないでどうする」

「ですよね。では何にしましょう？」

仕切りなおし、ご注文を伺う

「そうだな・・・・・・って、おい！！」

「はい？」

「これだけか、品は？」

やはり聞いてきたな。書こうかな、メニュー表。そっちの方が親切だよな

「品書きにはこれだけですけど、食べたい物を言ってください。知ってるもので作れるものなら作ります。何にしましょう？」

「そうだな、マーボー豆腐とチャーハンにしよう、たのむ」

「はい、よろこんで！　　どうぞ、突き出しになります」

今回は小鉢に野菜の盛り合わせ、いわゆるサラダを目の前に出した

「んっ、こんなもの頼んでないぞ？」

「これは注文の品が来るまでの【つなぎ】ですから、タダですよ」

そうか　といい食べ始める。表情を見る限り、気にってくれている様だ。　上々、上々

「はい、ご注文の品です」

「いただくか・・・・・・・、はぁ」

「とっと」
こけそうになる。　　食べながらため息って、今咥えてた煙管を落としそうになる

「お客様、なにか不手際でも？」

「いや、何でもない。こっちの事だ、気にするな」

「そうはいってもですよ、そんな暗い顔をしながら食べてたら美味しいモンも美味しくないでしょう」

「むぅ」

「まぁ、話してみて下さいよ。屋台の店長でも手助け出来るかもしれませんよ？」

「・・・・・・・・わかった。実は・・・・・・」

「なるほど、上司が元気が無いと。」

色々と大変なんですねぇ

「どうしたものかこまt「おーい、姉者！」んっ、おお！秋蘭！！」

「昼食か？なら私もいただこう」

青髪の女性が客に話し掛け、席に座る

へぇ、ものすげぇ美人姉妹もいたもんだ　誰なんだろう？

それにしても綺麗だ　うん、綺麗だ。　とりあえず二回言っておこう

後から来た妹さんに同じ説明をし、調理を始める

「華淋様はどうだ？」

「先ほど、医者に診てもらった。なんでも血が足りないらしい」

血ですか、大変ねぇ

「血が！！」

代じゃ大事だよな

「どうするのだ！？」

「こればかりは私でも解りかねる」

ぇ。そろそろかな

「お客さん、出来ましたよ」　品を出していく

「すまん、いただこう．．．．．．っつ！！！美味い、美味しいぞ店主よ」

バンバンジーを一口食べて、言って貰えた　　高評価だ！！　ッシ！！！小さくガッツポーズ

「ところで、お客さん達の上司は血が足りないって？」

煙管に火をつけ、聞いてみる

「ああ、それがどうした？」

ほうほう、貧

まぁ、この時

悩んでますね

「それは多分、貧血って奴ですね」

「ひ、ひんけつ？」

「えぇ、心の蔵が強く打ったり、めまいが出たり、たまにボォーっとするんじゃないんですか？
後、目の下が白くなってたりしませんか？」

「なっ！どうしてそれを！？」　姉の方が何処からとも無く、大剣を出して来た

「ちょっ！！」

「姉者！！！！」　妹さんが止めてくれる　あぶねぇーーーー

「で、店主よ、治し方知っているのか？」　この妹さん冷静だなぁ、本当に姉妹か？

汗を拭きつつ
「そうですねぇ、例えば海藻類とかですね。昆布やワカメなどを取るといいとおもいますよ」

「昆布は出汁を採るので知っているが、ワカメとは？」

「こいつですよ」
と言い、お椀に味噌汁をよそいで出す

「汁の中に入っている黒いのがワカメです」

二人とも味噌汁を見ている。　まぁ、めずらしいだろうねぇ

あっ、そうだ
「あのー、お二人さん。提案があるんですけど．．．．」

「「んっ、なんだ？」」
おお！ハモった！！　やっぱり姉妹だ！！！

「自分に料理を作らせてくれませんか？」

「「は？？」」

「お話を聞いていて、お二人の上司に対する思いに感動しました
是非、自分にやらせてもらえませんか！？　お願いします」
ピッタリ角度１２０度で、頭を下げた

「「・・・・・・・・・・・・・・」」
沈黙の時がながれる、ダメか？　ダメなのか！？

「秋蘭」

「なんだ、姉者？」

「私はこの者に決めたぞ」

「フフッ、姉者が決めたのなら、私はかまわんよ」

シャアァ！！！
！　今回は大きくガッツポーズ

「よしっ！！おい、店主！！！　名は！！？」

「はいっ！　姓は臧　名は覇　字は宣高と申します。改めて宜し

くお願いします！！！！！！！」

俺のうでが何処までやれるか解らんが、やってやるぜーーーーーーー

「うむ！　わたしは『夏候敦　字は元譲』だ。頼むぞ」
「妹の『夏候淵　字は妙才』だ。此方こそ宜しく頼む」

…………………………………

………え っ ？

はぁーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！

マ、マ、マジでかっ！！　超大物じゃん

し、しし、しかも女性って

ど

うなっとんじゃーーーーー！！！！

## さらに、夏、迫る（後書き）

反省会

はい、３話目ですね
此処から主人公の苦行が始まって行きます
お楽しみにして下さい

御見苦しいとは思いますが宜しくお願いします

今回出て来た品は『サラダ』『チャーハン』『バンバンジー』『味噌汁』ですね

コレだけ出てきたら、ちょっとした定食です　はい。

では今度は４話目でお会いしましょう

## 夏に挟まれる。そして、接近遭遇

ＳＩＤＥ：軍侍

今、俺は非常に後悔し、焦っている

「どうしたものかなぁー」

道の真ん中で頭を抱え、膝を抱える

「ジャマだよ！！！！！」

荷車を引くおっちゃんに怒られる、あたりまえだよね？交通の邪魔してるよね　はい、どけます

※回想

「あのー、お二人の上司ってもしかして・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・曹孟徳？」

「キサマ！華淋様を呼び捨てにしたな！！？」

用意に剣を振り回すなよ！！！！　だから、不

「はぁ、姉者、そこまでだ」

やれやれじゃねぇーよ、妹さん　この人、いつもこうなのか？

「秋蘭が言うなら。臧覇よ、この町の領主である華淋様に出すのだ、不味い物を出すと言う事は解っているだろうな！？もしそのようなことがあれば・・・・・・・・・・・・」

ジャキンッ！！！！！

構えるな、構えるな！！つぅーか、鼻先当たってる！！！！

「姉者、当たってるぞ。それと、そぉ脅すな。まぁ、そぉ重責に思わず、いつも通りに作ってくれれば良いさ」

この人は良い人だｙ「華淋様は味にはうるさいからな。そこは知っといてくれ」、なんでそんなお土産をおいていってくれるかなぁ・・・・・・・・・・はぁ

回想ＥＮＤ

「まぁ、うじうじしててもしゃーねぇ！　《アソコ》に行けば、何かあるだろう」

俺は気合を入れて、相棒に火をつけ、歩を進める。　例の場所に向かって

その場所とは、此処陳留でもめずらしい、いわゆるスラム街のような場所の近くの路地のおくーーの方にある店。初日に散策中に見つけたのだが・・・・・・

「大将、やってるかい？」
戸を明ける。すると、『カラーン』と音が鳴る

「いらしゃい」　不愛想げに返事をしてくる　　まったくこの人は

「良いものはあるかい？」

「また、あんたか。物好きだねぇ、わざわざこんな辛気臭いトコに通うなんて」

嫌そうに言うなよ。本当は嬉しいくせに

「まぁまぁ、そぉ言わず。で、珍しいもんはいってるかい？」

「はぁ。こっちきなよ、入ってるからさ」

ため息ってどうなのよ！？　失礼じゃぁないかい？

奥に入っていく店長を追いかけ、ついて行く

此処は店長の趣味かなんなのか知らないが、あるとあやゆる珍しい

食材を取り扱ってる。

「コイツだよ。亀のようだな。池で見つけてで飼ってたらしいが、奥さんが気味悪がって捨てようとした所を貰って来た。まぁ、不味そうだな」

「・・・・・・・・・」

俺は心底驚いていた。目の前で動いてる生き物に

「あんたでも押し黙るほd「いくら？」、何だって？」

「だから幾らかって。こいつを買うよ、まだある？」

「ソイツと合わせて二匹だ」

「全部買うよ。それと鳥の臓物といつもの香辛料を頼む」

ＳＩＤＥ：店長

急に真剣な顔し始める　　なんだ？

そんなに気になるのか、この亀が。何なんだ

そして、二匹とも買うという。いよいよ何なんだ、おまえは？

この亀もどきと目が合い、心の中で聞いてみた

「なぁダンナ、こいつは何なんだい？」

「こいつはな、【すっぽん】っていう生き物だよ。亀の遠い親戚かな」

ＳＩＤＥ：軍侍

俺は水を張った桶にすっぽんを入れ、香辛料と他の食材を受け取り、扉の方に向かう

「大将、偶にはたべにきてよ？」

「はいはい」と言い、顔をこちらに向けず手だけ振って挨拶する
まったく、失礼じゃぁないかい？

戸を開け、出て行こうとすると・・・・・・・

ドッ！

「きゃっ！！？」

「おぉーっと！！！？？」

こけそうになるが、何とか押し留まる　　誰かとぶつかったようだ

「大丈夫かい？」

「えぇ、なんともないわ」

「じゃぁ、悪いね。ちょっくら急ぐんで」

「ちょっとまちｎ――――――」

何か言ってたようだが、こんなレアモノと出会った今の俺にとちゃぁ気にするとこでは無い

急いで帰らねば。まってろよ、すっぽんちゃん。おいしく調理してやるからな

そして、まってろよ曹孟徳！！　俺の料理でギャフンといわせてやる

そう思い、足取り軽く走っていく。

後に後悔するとも知らずに・・・・・・

## 夏に挟まれる。そして、接近遭遇（後書き）

反省会

はい、４話目です

今回は料理は出てきませんでしたが、食材として【すっぽん】がでてきました

この時代にすっぽんがいたのかは解りませんが・・・・

すっぽんは本当に女性の味方ですね。

食べると、元気になるし、お肌にもテキメン　今流行のコラーゲンを多く含んでいます

さらにもう一品作る予定です

お楽しみにしてください

次回５話目でお会いしましょう

御見苦しいと思いますが、宜しくお願いします

## 夏との決闘　その前に下準備

ＳＩＤＥ：軍侍

「女将さーん、ただいま！！」

俺は宿泊している宿に帰ってきた

「宣ちゃん、おかえり。今日はどうだったかい？」

俺のことを『宣ちゃん』と呼ぶこの人は、この宿の女主人で、この町でのお客第一号である

飯を食い終わった後で、改まって『ウチへ泊まりな』と言われ、新手の恐喝か！？と思いきや

『アンタの料理にほれたよ、ウチに来な！！』といわれ、今も泊まらしてもらっている

「今日も沢山鍋を振ってきたぜ！！」

「そいつは良いことだ」

軽い雑談を交わし、持って帰ってきた材料を見せて

「また、鍋借りても良いかい？」

「良いよ、好きに使いな。でも、分かってるだろうねぇ？」

「はいはい、わかってるよ。片付けはしっかりとだろ」

「よろしい！」

と言い、女将さんは奥に引っ込んでいく

「ふぅー。明日は早ぇーぞ。もう寝るか」

明日は夏候姉妹がくる日だ　・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・寝れるかなぁ？

今日は早く起き、仕込みを始める

タオルを頭に巻いて、白衣に着替える　顔を叩いて、気合を入れる

　この辺から《キュー◯ー、3分クッキング》のテーマソングが流れてます

まずは一品目：すっぽん鍋

最初にすっぽんを捌いていく。すると・・・・・

甲羅上下が2枚・足つきの切り身4枚・頭　を残していく

鍋を二つ用意し、1つに水を入れ、沸かしていく。沸いてきたら切り身を入れ、煮ていく

その後、水洗いしていく

2つ目の鍋に新たに水を張り、切り身、乾燥昆布、そして臭味消しの酒を入れる（この時、細めに灰汁を丁寧に取っていく）

少し煮ると、自家製醤油、塩、みりん、が無いのでもう少し酒を加えて、大体2時間程煮ていく（因みに煮れば煮るほどOK！）

ゼラチン質の部分が柔らかくなるまで強火を決め込む

柔らかくなったら、火を弱くして、野菜（豆腐、白ねぎ、人参、白菜、椎茸）を投入していく

さじで確認し美味しく出汁が出てたら、出来上がり！　完成です！！！！！

付けタレに自家製のポン酢もどきを添えて

二品目：トリモツ煮

鍋ですっぽんを煮ているときに、作っていきます

まず、用意するのは・・・・・・

レバー、砂肝、はつ（余分な所を切り落とす）

きんかん（特になし）

鍋の中に醤油、砂糖（貴重品だけど使ちゃう）をいれ、煮たたせる（強火）

最中に汁がトロミが出てきたら、酒や水で延ばしていく

泡が立ち、沸いてきたら、もつを入れ、少し混ぜ、蓋をして見ていく（泡が立ってきたら、混ぜながら様子を見る）

※焦げやすいので注意

最後にタレともつをしっかり絡めていき（鍋の淵にも付いているので残さず）、皿に盛れば完成！！

「ふぅー、ついつい本気を出してしまったぜ」

「何に本気を出したんだ？」

「うひょひょい！！　なんだよ、お二人さんか。びっくりさせないでくれよ」

秋「ふふ、すまない」　春「この程度で驚きおって」

「で、どうだ？」

「まぁ、やれる事はやった。後は神のみぞ知るところだな。気になるなら食べてく？」

「姉者、どうする？」　「当然だ！」

・・・・・

ＳＩＤＥ：秋蘭

春、秋「「・・・・・・・・・・・・・」」

私達は臧覇から鍋二つを受け取り、華淋様の下へ向かっていた

姉者はもちろん、私もしゃべる事が出来なかった

そうこうしていくと、華淋さまの部屋の前に着き、入っていく

「お帰りなさい、2人とも。で、どうだったのかしら？」

春、秋「「・・・・・・・」」

SIDE：華淋

「どうしたのかしら、ふたりとも？」

2人の様子がおかしい、そう例えるなら何かに打ちのめされた様な感じを受ける

「華淋様」

「なにかしら、秋蘭？」

いつも冷静な彼女が、意を決したように話し始める

「覚悟して、食べてください」

は？何を言ってるの？　たかが屋台の店主が作った料理で覚悟しろなんて

でも・・・・

「あなたがそういうのなら。いいわ、いただきましょう」

私は後悔することになる

【たかが】

そのような言葉を使った自分に

## 夏との決闘　その前に下準備（後書き）

反省会

はい、５話目です

姉妹の反応は次で華淋様と一緒に視ていきます

今回出て来た料理は【すっぽん鍋】【トリモツ煮】ですね

トリモツ煮は感想の中に「幾夜さん」が【レバー】でも良いと書いていただいたので、どうせなら最近自分がハマっている【甲府とりもつ煮】を作らせようと思いました

Ｂ－１グランプリ以降、自分の住んでいるトコでもスーパー等で見かけるようになり

自分でも作り、サイコーにご飯が進みます

幸せです

次は６話目でお会いしましょう

御見苦しいと思いますが、宜しくお願いします

## 決闘の最中、猫を助ける？

ＳＩＤＥ：軍侍

煙管を吹かしながら、ただ今休憩中・・・・・・・

フゥーーーーーーー

「今頃喰ってんのかなぁ？　今回は、結構本気だしたからな
まぁ、なるようになるよな」

吸い終わり煙管のケースにしまい、汁の調整をしようと鍋の前にたった時だった

「な、なんだぁ！？」

珍妙なものをいた、いや、倒れていた・・・・・・
どうする、オレ！！？

ＳＩＤＥ：華淋

秋「二品ありますが、まず一品目です」

私の前に器が置かれる。中身は黒い汁の中に、茶色い物がゴロゴロ入っている
見た目は非常にアレだけど、何とも言えない香りが漂う

いわゆる、『食を誘う香り』　　最近疲れているせいか食事が美味しそうに見えなくなっていたが
料理の香り一つだけで、このような気持ちになることなんて、いつぶりかしら

「でわ、いただきましょう」

一口食べてみる・・・・・・っ！！！

口の中で具材がほろほろと崩れていく、そして煮込んであるタレが甘辛く、丁度良い濃さをしている

もう一口、今度は食感が違う　こりこりとしているが、柔らかくタレが中まで染みている

春「華淋様、コレを上に乗せて召し上がってください」

春蘭はそう言うと、あるものを乗せていく　　『刻んだ生姜』

また一口・・・・・・、っ！！！！！！！

生姜の威力は絶大だった。タレの味の中に生姜のピリッ！とした味が更に箸が進む呼び水となる

「秋蘭、すまないけどごｈ「ご飯がほしくなりましたか？」・・・・、なぜ？」

「私もそうしたからです。もちろん、姉者もですが」

春蘭も頷き、ご飯をよそって私に渡してくる

ご飯と食べても美味しい。タレ自体がご飯単体の味に合わせってくるように馴染んでいく

秋「この料理は『鳥のモツ煮』といいまして、鳥の内臓を使用しています

華淋様は血が足りないと診断されました。故に肝の臓の部分を使う事で、足りないものを補う。

更に生姜を加える事で体の働きを活発にしてくれる作用が有るそうです。現に体が温まった感じがしませんか？

因みに肝の蔵は新鮮なものであれば、生での食べれるそうです」

確かにコレを食べてから、体の奥に熱を感じている。　生姜のせいだったのね

「驚いたわ、このような料理があるなんて。秋蘭、あなたの言った意味が解ったわ」

秋蘭は首を横に振り、言う

「まだまだです、コレは序の口です。此処からが本番です」

何ですって、コレがまだ前菜だというの！！？？

「姉者、頼む」　「うむ！！」

秋蘭が皿を片付け、春蘭が二品目を運んでくる

鍋のようね、中身は何かしら？

春「『すっぽん鍋』です」

？？？？？

すっぽん？？　聞いた事無い名ね、何かしら？

「思うこと、ごもっともだと思います。すっぽんは生き物の名前になります」

「ますますわからないわね、どういった生き物なの？」

「はい、店主がいうには亀の遠い親戚だそうです」

「か、亀？食べれるの？」

「私共も、最初は耳を疑いました。現に姉者が怒り、店主を斬りそうになりm「しゅ、秋蘭！？」」

「はぁ、何をやってるの？あなたは」　「ううっ、す、すいません」

「いいわ、暖かい内に頂きましょう」

蓋を開けると、色とりどりの野菜がある中で・・・・・・、足が在るわ　足が

大丈夫よね？　って、よく視ると頭まで在るじゃない！！！

「見た目は少しアレだけど、香りは中々ね」

先ほどのモツ煮と比べて、鍋にしては香りは少し薄く感じる

私は肩透かしをくらったと思い、レンゲを出汁にあて、一口すすってみる

！！！！！！！！！！！！！！！

！！！

な、なな、何なの、この出汁！！！　濃厚な味わいの中に野菜とこれは海草の類かしら、何にせよすべての旨味が凝縮していて、尋常では無い事が伺える

そして、もう1つある。出汁の中に感じる、とてつもないものを・・・・っ！、まさか！？

あわててすっぽんの身を食べてみる。やはり、これだったのね

更に野菜にもしっかり出汁が染み渡っていてる、最高だわ

それにしても、このすっぽんなる物。本当に珍妙ね

歯応えのある部分もさる事ながら、このプルプルした部分は何かしら？　　気になるはね

秋「その部分ついても聴いて参りました。
　すっぽんは元気が無い時や疲れている時に食べる物、『滋養強壮』だそうです。人によっては血も　飲めるらしいです。そのまま飲むもの、酒と一緒にと、様々な食し方が在るそうです
　また、華淋様が気になってる部分には【こらーげん】なる物がはいってるそうです」

「こらーげん？初耳ね」

「はい、なんでもそれは人の肌に作用するらしく。そのこらーげんが含まれる物を定期的に取ることで肌に艶やハリが出てくるそうです
それと、出汁と具を残しておいて下さい」

「へぇー、すごいわね」

・・・・・

「でわ、最後の仕上げになりますので、しばらくお待ち下さい」

しばらくすると、春蘭達が帰ってきまた鍋を置き、蓋を開ける

「これは、何？」

「【おじや】です。出汁の中にご飯を入れ、上から解き卵をかけて、再び暖めたものです」

またも驚いた。料理じたいは簡単なものなのにどうしてこんなに美味しいの

タマゴがまた、味がまろやかにする役割を果たしていて、とても気が利いている

「ごちそうさま。春蘭、秋蘭、想像以上だったわ」

「「はっ！恐悦至極でございます」」

「このような料理を作ってくれた者はすぐにでも呼び出したい。っと思ったけれど、そうはいかないわ」

秋「どうかしましたか？」

「体が火照ってしかたがないのよ？　　二人とも！！！！！」

春・秋「「はいっ！！」」

「今夜は激しくイクわよ・・・・・・、覚悟しておいてちょうだい。
フフフフ・・・・・・・」

春・秋「「御意！！！！！！」」

礼を言わせてもらうわ、屋台の店主さん

こんなに気分が良いのは久しぶりよ？

絶対に御礼を受けてもら

うからあなたも覚悟しといてね

ＳＩＤＥ：軍侍

「へぇーーーーっ、しょい！！　チクショォ」

風邪でも引いたかな？ゆうーて、寒ーしな　うぅー寒い、寒い

「コイツ、どうしよう？」

屋台の上ですやすやとかわいい寝息たてて、一人の少女が寝ている

オレは後ろを振り返り、また屋台を引きながら宿へと帰っていった

## 決闘の最中、猫を助ける？（後書き）

反省会

はい、６話目です

今回は非常に書き疲れました
味の表現に苦労、苦労で大変ですよ

まぁ、味に関して言えば人それぞれですから、そこんとこ宜しくお願いします

さて、そろそろ時間を進めて行こうと思います

でわ、次7話目でお会いしましょう

御見苦しいとは思いますが、宜しくお願いします

**助けた猫に怒られる・・・・何故？そして、呼び出しをくらう**

ＳＩＤＥ：？？？

はっ！！

私は目を覚まし、あたりを見渡す

此処は何処だろう？　宿だとは察するが、私は泊まった記憶が無い

「どうしてこんなところに？」

私が思考をめぐらしていると、いきおいよく戸が開く

「おおっ！起きたかい、お嬢ちゃん？」

「っ！！」

びっくりしたぁ、急に大声ださないえでよ

「此処は何処ですか？」

「ここはあたしがやってる宿で、わたしは女将だよ」

「そうなんですか、ありがとございます。でも、どうして私は此処に？」

「あんた覚えてないのかい？」

「はい。陳留についた事は覚えてるんですが、途中からの記憶が無いんです」

「そうかい。ウチの客がね、道で倒れてるアンタを拾って来たんだよ。
『猫拾ったんだけど、どうしようか？』って、それで見てみたらアンタが宣ちゃんの背中にいたってわけ」
猫ですって！！？失礼な。私の何処が猫なのよ、まったく
「そうですか？大変しつｒ“グゥ～”／／／／／／／／」
自重しなさいよ。こんな時に、よりにもよって・・・・・・恥ずかしい
「はっはっは！！宣ちゃんの言うとうりだね、まってな。今持ってきてやるから」
そう言うと女将さんは部屋から出て行った
「もぉ～、どうしてこんな時に」
でも、確かにお腹は減っていた
あのバカ袁詔の所から直ぐに此処にやって来たものだから、最低限のものしか持って来なかったから金子もつきそうになって・・・・・・っ！！
私、空腹で倒れたの！？うそよ。なんてみっともない
「あんた、大丈夫かい？」
「うわっ！！？」
気づいたら女将さんの顔が目の前にあり、ビックリしてしまった
「失礼な子だねぇ～、折角ご飯をもってきてやったのに」

「すいません。でも私お金が無いんです」

「そうなのかい。まぁ安心しな、これは宣ちゃんがあんたにって作ったモノだから。
安心して食べな、金なんか取らないよ」

「そうなんですか、ありがとうございます」
内心ホッとしながら、食器を受け取る　イイ香りがする

「あたしは仕事があるから行くけど食器は厨房の入り口にでも置いといて」

「わかりました」

私は返事をすると、食器の方に目をやる

鍋のようだが、蓋を開ける

フワァ～っと、やさしいイイ香りが部屋中にたちこむ。美味しそう
雑炊ね。タマゴとこれは鶏肉かしら、それと別に薬味としてねぎ、
生姜

レンゲで掬い、別の器にいれ食べてみる

「おいしい・・・」
あっさりとした出汁にタマゴの絶妙な柔らかさ、そして鶏肉もご飯
とタマゴの邪魔をせずとても食べやすい食感と味をしている
さらに薬味を加えると、またもや美味しくなってしまう

気づいたら鍋の中身を全て食べてしまった

「食器を返しにきました、ごちそうさまでした」

「おや、もういいのかい？」

「はい、大変美味しくいただきました」

「そうかい。それは宣ちゃんに言ってやりな」

「その宣ちゃんって人はどこにいけばあえますか？」

「今日は大通りのトコで開いてるって言ってたから行ってみなよ。頭に白い布を巻いて、白い服を着ていて一心不乱に鍋を振ってる奴がいたら、その子が宣ちゃんだよ」

「わかりました、お世話になりました。ありがとうございます」

「あいよ、またきなよ」

別れの挨拶をすまし、宿を出て大通りを目指し歩いて行く

「どんな人があんな美味しい料理を作ったんだろう」

目的地に着き、私は目を疑った

女将さんが言ってた外見の人物を見つけたのだが・・・・・

【男】だったのだ

「うそ・・・・」

ＳＩＤＥ：軍侍

「ありがとうございました、またのお越しを！！はいっ、お待たせしました飯、汁物が二つと野菜炒めが１つと魚の煮つけです」

「ほんとに言ったモンが出てきたよ」

「なっ？いったろ。美味いから食べようぜ」

う～ん、イイ笑顔だ。そして、イイ食いっぷりだ、さすが兵隊さんよく食う

「いいかしら？」

「へいっ！！いらしゃっ、おお！アンタ、もういいのかい？」

「ええ、平気よ。それよりも世話になったわね、それと食事、美味

しかったわ」

「食べれたか、そいつは上々。ちょっと待っててくれ、直ぐお茶をだすから」

「ええ、お願い」

なにやら慌てた様に返事を返してくる、どした？

そんな事を考えつつ、お茶を出し、他の客をさばいていく

大体さばききり、ようやく話せる時間が空く

「まずは自己紹介だ。おれは臧覇、字は宣高、よろしくな」

「私は荀？、字は文ジャクよ」

ワァ～オ、コイツはとんだ大物を拾っちまったよ

「マジかよ、王佐の才かよ」

「何か言ったかしら？」

「いいや！？なんでもないよ。気にすんなって」

「そうかしら？」ジーーーー

ジト目で見てくる。怖い怖い、そんな目で見るなよ、こぇーよ

「どうしてこの陳留に来たんだ？」

「なんでアンタにそんな事言わなきゃいけないのよ！」
そんなに怒る！？もしかして訳ありか？そいつはまずかったな
「悪い、無粋な事を聞いてしまったな。スマン」
とりあえず、頭を下げる
「わ、解ればいいのよ・・・・」
許してもらえたようだ、よかったぁ～
「そういえば、曹操さんトコの人が文官募集の札を張り出すって言ってたな
荀？もそれを聞きつけて来たのかなって思ったけど。違ったのかぁ」
「それホント！！！？？？」
ものすごい勢いで食いついてくる。なんだ職さがしかぁ～
「なんでも人手か足りなくて、睡眠が十分取れないぐらいらしいよ？」
「な、な、なんですって！！？あの美しい曹操様がそのような事に。早くお助けしなければ」
「おいおい、落ち着けよ。そんなんじゃ、受かるモンも受からんぜ」
血気盛んに行こうとするので慌ててとめる
「フーー、フーー、そうね。我ながら自分を見失ってたわ」

「あわてんぼうだねぇ～。おっ、そうだ。君の合格を祈願して・・・・・」

ＳＩＤＥ：荀？

「あわてんぼうだねぇ～。おっ、そうだ。君の合格を祈願して・・・・・」

そんな事いい、男は料理を始めた

それにしてもこの男は何かしら？いつもの私ならさっさと礼をすまして、早く城に向かおうとするのだが、なにかしらこの感じ・・・

引き込まれるって感じかしら？なんにせよ男だからイヤなのに、何でもない駄話をしてしまう

そのような事を思っていると目の前に料理が出てくる

・・・・・・・・・・・・何かしらコレ？

ＳＩＤＥ：軍侍

「おまちっ、カツ丼です」

なにやら摩訶不思議なものを見るような目で見ている

「何これ？」

「これは“カツ丼”っていう料理です」

「カツ丼？」

豚肉をあげたもの、細かく切った玉葱を少し濃い目の出汁に入れ、少し煮た後ときタマゴを回し掛ける。そうして、タマゴが少し固まってきたら小ドンブリにご飯をよそい、その上に掛ける
その上に三つ葉を乗せ・・たいけど無いので我慢する（因みにパン粉はただ今考案中なので、今回は天ぷら風にしています）

「へぇ～、変わった料理ね」

「試験に勝つ。“勝つ”と“カツ丼”・・・いかかですか！？」

そんな事はどうでもいいと言わんばかりに、無視をして彼女は食べ始める
なんかさぁ～、あるでしょう？なんかリアクリョンとろうよ。無表情を決め込まれたらさぁ
よけいに惨めになるから

まぁ、おいしそうに食べてくれている。女性だからかき込んで食べずに、丁寧に食べていてイイトコの生まれというのが伝わってくる

イイねぇ、かわいいねぇ～

「ちょっと、何視てんのよ？気持ちが悪い」

撤回。かわいくねぇ

「ふぅ〜、ご馳走様。
まぁ、美味しかったわよ」

「左様でございますか」

「そろそろ行くわ。美味しかったからまた来てあげるわよ
それに採用試験に・・カ、カッテ来るわよ」

「ぜひ、またのお越しを（ニコッ）」

「／／／／／／／／」

足早に去っていく彼女を見つめながら
「大丈夫だ。キミなら絶対に受かるから」っと呟く

その日の売り上げも、上々。店終いを始める、すると・・・・

「もう店終いか？臧覇」

「んっ？おや、妙才さんじゃないか。どうしたんですまた？
あっ！？まさか、この前のことで何か」

「まぁな」

そう言うと、真面目な顔をし竹巻を広げ言う
「『屋台店主・臧覇に命ずる。領主・曹孟徳様の命により、明日城まで来られたし』だそうだ。
ん？どうした、そんなすっとんきょな顔をして」

そりゃ、アンタ。
こんな顔にもなるでしょ。

マズイって、マズイよ。どうする！！？？
何が？何がいけなかった？
本気になりすぎて、調子に乗って何かミスったか

そんな事を考えてると

「つたえたぞ？
そしたら、何か食べていこうか・・ん～そうだな」

妙才さんが注文で迷っている。そんなことよりも、どうしよう～～

気が気ではないながらも料理を作っていく

か？

妙才さん、自分はちゃんとつくれてます

## 助けた猫に怒られる・・・・何故？そして、呼び出しをくらう（後書き）

反省会

荀？さんの登場です
話が少し進んだかな？

さぁ、次回は遂に華淋さんと対峙します

さてさて、主人公の運命はいかに！？

今回の料理は【カツ丼】ですね

おいしいですよねカツ丼。自分的にはドンブリ界のＨＥＲＯであり、頂点な気がします

大学の学食で運動部の皆さんがカツ丼に『マヨネーズ』をかけてやがる

なんということを。

ショックでした、ええ、ショックですとも！！！！！！！！！！！！

はい、次回８話目でお会いしましょう

御見苦しいと思いますが、宜しくお願いします

**お、お前！あいつだったのか！？（最低の引っ張り方）（前書き）**

感想にリクエストしていただけると嬉しいです

いただいたモノはガンバって話に組み込んでいこうと思います

## お、お前！あいつだったのか！？（最低の引っ張り方）

ＳＩＤＥ：軍侍

胃が痛い、いてぇーよ。　マジで

はぁ～、どうすんの？この状況

ねぇ？初めてだよ、こんなに緊張してんの

「どうした、臧覇？」

「あぁ、妙才さんか

オレ、なんかやらかしましたか？」

「まぁ、やらかしたといえばやらかしたのかもしれん

いつものヤツはどうした？」

「煙管のことですか？すってる場合じゃないですよ。咥えてるだけで精一杯

はぁ～、憂鬱ですね

それはそうと教えてくださいよ、結構本気出して作ったんですけど、ダメでしたか？」

「そう暗い顔をするな。直にわかるよ

ほら、ちゃんと身だしなみを整えろ」

正解を知ってる感じで質問が流される。どうしよう？

はぁ～～、ため息しかでねぇ

「さぁ、そろそろ時間だ。行くぞ」

「へ～イ」

玉座の間にて・・・・

「平伏して待つように」

元譲さんから指示を受け、待つ。胃痛に加えて、頭痛もしてくる

オレは、今、確実に追い込まれている。もうらくにしてくれよ～～

「領主、曹操様。御成りである」

誰かの声で、周りの空気が変わる。なんか温度が下がった感じがする

「面を上げよ」

はっ！？緊張しすぎて反応が遅れた、あぶねぇ、あぶねぇ

言われたとうり頭を上げる・・・・・ん？

・・・・・・んんっ！！？？？

見たことあるぞ。どこかで・・・・・・・

「あっ！！！」

「どうした！！」

ヤベェ、元譲さんがものすごい形相でこちらを見てくる

「春蘭、よしなさい」

「はっ！！」

元譲さんを一撃でおとなしくさせる。そして、こちらを見る

【ニヤニヤ】してこちらを見ている、この人気付いている

「昨日はどうも。まさか、あなたとはね
運命かしら？」

「イエイエ、メッソウモマイ
モッタイナキオコトバヲ。スイマセン。ホント、スイマセン、」

「あら、そんなに緊張しなくてもいいのよ？
あの時は、あなたも急いでたみたいだし？わたしも不注意だったから、しかたがないわ
ただ、一言あってもよかったんじゃない？」

・・・・・・確かに。レア物があったからとはいえ前方不注意だった。しかも、両成敗とはいえ女性にぶつかったのだからアレは無かった

『急いでるんで』は無いだろう
しらなかったとはいえ、相手はこの町のお上なのだから

ＳＩＤＥ：華淋

まさかあの時ぶつかった男が正体なんてね、運命かしらね
ここは１つ・・・

「昨日はどうも。まさか、あなたとはね
運命かしら？」

「イエイエ、メッソウモマイ
モッタイナキオコトバヲ。スイマセン。ホント、スイマセン、」

ちょっと、ビックリするぐらい緊張してるじゃない！声が変な感じになってるはね・・・
もう少し虐めてみようかしら、次はどんな顔をしてくれるのかしら

「あら、そんなに緊張しなくてもいいのよ？
あの時は、あなたも急いでたみたいだし？わたしも不注意だったから、しかたがないわ
ただ、一言あってもよかったんじゃない？」

さぁ、どう出てくるかしら

すると彼の雰囲気がかわる。何か考えてるようだ
深く考え、何かを納得したような顔をし、彼は言い放った

臧覇は綺麗に正座をし直し、着衣を整え、姿勢を正し、口を開く

『あなた様の言う事、一々もっともに御座います
まずは、件の失礼の談。平に、平にご容赦を
某、姓は臧　名は覇　字は宣高。以後お見知りおきを
あの時、自分は店にて珍しい食材を手に入れ、少々浮かれておりました
直後、曹操様とぶつかりました
知らぬ事とはいえ、町の長である貴方様に・・いえ、女性に対して失礼な事した件について謝罪が無かった事。
男として、ましてや、人としてあってはならぬ事に御座います
したがいまして、この臧覇。今一度、謝罪を申し上げます
申し訳ありませんでした』

正直驚いた

其処にいたのは正しく礼儀守り、とても床しい職人の顔そして、姿だった

その男は背は大きい方なのだが、先ほどの口上を述べている時から
彼の威風が、真剣さと合わさって、更に大きく見える
はっきり言って、先ほどまでいた緊張して、声がおかしくなってい
た男は無く、とても同一人物とは思われなかった

春蘭、秋蘭の両名も彼の口上に、そしてその態度に文句は無さそう
である
周りも彼のその堂々とした態度に魅入られているようだ
ほんとに驚かしてくれる。この男は

「見事！見事よ、臧覇！！
貴方の申し開き、確かに受け取ったわ」
そう言うと私は軽く拍手する
すると、つられて夏候姉妹を筆頭に手を叩いていく

「ねぇ、臧覇？」

「はっ！」

「私専属の料理人にならない？
貴方の作った料理はどれもすばらしかったわ、正直私でも同じよう
に作れるかどうかあやしいわ
どうかしら？高待遇でもてなすわよ」

「・・・・・・すいません、お断りさせていただきます」

「あら、なぜかしら？」

「お誘いは嬉しいのですが、自分が目指すモノは只１つ
『万人に愛される料理を作る料理人』に御座います
曹操様専属になれば、かないませぬ」

ぽかーんとしてしまう
「ホンキなの？」

「ホンキにて」

「くっくっく・・・・、あーはっはっはっは！！！！！
いいわ、いいわよ、臧覇
気に入った！！臧覇よ、あなたに褒美を取らせるわ。何がいいかしら」

「特に考えておりません、如何いたしましょう・・・・・おっ！そうだ
曹操様、今度ウチに食べに来て下さい
それで宜しいです」

「そんなの当たり前よ。是非行かして貰うけど、それではダメね」

「ん～、思いつきませんね」

「わかったわ。褒美は此方で決めるわ
それでいいかしら？」

「はい。特に物欲も無いので、貰える物なら貰いますよ」

ＳＩＤＥ：軍侍

城から出る
「ふぅ～～～、つかれたぁ～
もう帰って寝よ、今日は仕事ムリ

それにしてもなにくれっかなぁ、鍋とかがイイな、あと包丁でもいいな」

能天気にそんな事を考えている

しかし、予想は大きく裏切られ事になる

やり過ぎじゃぁないですかい、曹操様

**お、お前！あいつだったのか！？（最低の引っ張り方）（後書き）**

反省会

言葉使いは難しいです

今回は特に

料理は皆無でしたが、次からは頑張って行こうと思います

では、９話目でお会いしましょう

御見苦しいとは思いますが、宜しくお願いします

**待ってる時が一番楽しいって事多いよね？**

ＳＩＤＥ：軍侍

あの呼び出しが過ぎて、かれこれ一週間経つ

この間、曹操さんはもちろん、夏候姉妹も来てくれない。まぁ、理由は解ってるんだけどね

最近、巷を騒がしている【黄巾党】が頻繁に出てきているらしい

朝廷も権威はもはや尽きようとしている、世知辛い世の中になったもんだ

そんな中、楽しみにしている事がある

「にぃちゃ～～～～ん！！！！」

おっ！来たようだ、忙しくなるぞ

「来たな、季衣ちゃん。今日は何にするかね？」

「う～ん、そうだなぁ・・・

じゃぁ、今日もオススメで！！」

「了解」

先ほど言ってたお楽しみとはこの子の事である
最近、曹操さんトコに入った“許緒ちゃん”で、近衛を務めている
そうだ。若いのにエライねぇ

「おまちどうさまでした」

「いったきま～～す！！」

彼女の前に料理を出すと、目をキラキラさせてパクついていく
すごい食いっぷりに目の癒しをおぼえ、楽しんでる
因みに出しているモノは、薄めに味付けしたご飯四合のチャーハン
の上に回鍋肉を乗せた、オリジナル料理である。試作段階のモノで
も美味しければ食べると言ってくれているので助かっている

「美味しかった～～、ごちそうさまでした！！！！」

この挨拶も教えてあげたら農村出だからなのか、気に入ってくれて
使ってくれている
ホントにいい子だよ、お前は（泣）

「そういえば兄ちゃん、字を教えてほしいんだけど、いい？」

「そろそろ休憩だから良いぞ
でもまたどうして？勉強か？だとしたらエライなぁ～～」

そう言い、頭を撫でてあげる

「エへへ～／／／／／
華淋様や秋蘭様が『軍に入ったんだから、報告書をだしてほしい』
って言われたから
あんまり勉強ってキライだからいやなんだけど」

その気持ち解るぞ
オレにもそんな時期もあったもんだ。

ウンウン、解るぞ

腕を組み共感する

「もう1つは友達に手紙を出そうと思ってるんだ！！」

「友達？」

「うん！おんなじ村の子なんだけど、一緒にはたらかないかな～って思って
だから、手紙を出してこっちに来てもらおうと思ってるんだ」

「へぇ～、そいつはイイ。だったら、ちゃんと書かなきゃな
お～し、任しとけ！！
兄ちゃんの腕にかけて教えてやるぞ～」

「うん！！」

季衣ちゃんに字を教え、手紙を出してから更に四日ほどたった

何だろうなぁ、曹操さんの褒美って

調理機具だったらいいなぁ、最近客が増えたせいか若干効率が悪く感じるときがある

そんな事を考えてると・・・

「あの～、やってますか？」

「ん？おおぅっ！！

すいません、少し考え事をしてまして

何にしましょう？」

小さな女の子が其処にはいた

この子との出会いが自分の人生に大きく関わってくる事になるとは

この時はそんな事を露ほどにも思っても無かった

## 待ってる時が一番楽しいって事多いよね？（後書き）

反省会

今回は少し短めです

そして今回のメイン料理はチャーハンの回鍋肉乗せです

カロリーは高いです

でも、意外と美味しいんですよ

では次回は9話目でお会いしましょう

宜しくお願いします

**幾らなんでも、それは無い！！**

ＳＩＤＥ：？？？

「そんな子はいないねぇ～」

「そうですか。忙しい中すいませんでした」

私は建物を後にする

「はぁ～。

もぉー、どこにいるの？手紙には大きなお城で働いてるって書いてあったけど

それっぽい所は聞いて回ったけど、いないじゃない」

ぐぅ～～

おなかに手を当て、私は少し恥ずかしくなる

そういえば、そろそろ日が暮れようとしている

今日はこのくらいにして、また明日探そう

わたしはそう思い、大通りに出て夕飯の場所を探し始める。すると・・・

「店長、美味しかったよ。また来るぜ」

「またのおこしをー！！！

へい、おまち！！「お酒、お願い」はい！少々おまちを～」

１つの屋台に目が止まる。すごく賑わってる
たった一人で結構な人をさばいてる、すごいなぁ～

私は少し様子を見て、お客さんが捌けて来るのを見計らって席に座る

「へい、いらしゃい！何にいたしましょう？」

私は品書きを見ると、物が少ない事に気付く
そんな事を考えてると、隣に座っていたおじさんが話しかけてきた

「おじょうちゃん、この店は初めてかい？」

「はい」

「ここはね、好きな物を頼んで良いんだよ
此処の大将の作れるなら、それを作ってくれるから」

「おっちゃん、それはオレが言う事だろ？
まったく。そろそろ帰ろうぜ？でないと、かみさんがまた探しに来るぞ」

「おっと、そうだな。勘定たのむよ」

「あいよ」

そんな会話をし、帰っていく

「それで、どうする？」
と店長さんが聞いてくるので・・
「チャーハンをお願いします」
「あいよ。
チャーハン、１つ！！」
「ほい、お通しだよ」
目の前に小鉢に乗った黄色いモノが出てくる、漬物だろうか？
「えっ！？
あの、頼んでないんですけど」
そう言うと、店長さんは説明をしてくれる
へぇ～、おもしろい事をかんがえるひとだなぁ
漬物を食べながら、店長さんの調理を見ていく
小さい器に、片手で割ったタマゴを落とし、左手に持った菜箸を使って中身を溶いていく
カッカッカッ！！と耳障りの良い音がしてくる
次に皿に適当にご飯を取る
中華鍋を取り出し、火に掛け、温まって来たら、油を入れる

ここからの調理速度はグンッと速くなる

鍋にタマゴを入れ、少しかき混ぜご飯を入れていく
すると、店長さんはお玉を逆手に持ち直し、底の方でご飯を押さえていく
それが終わると、お玉を木ベラに持ち替えすばやくご飯をきっていく、次に鍋を振る
これを数回繰り返していくと、さっきまで白い部分があったが見事な黄色にご飯が変わっていく

具を入れ、更に鍋を振っていく
調味料を加え、鍋肌に回し掛け入れていく
私も料理を得意としているが、はっきりと解る

『この人は上手い』

この人の手つきを更に視ていく
終盤に火を弱め、刻んだネギを加え、ほぼ余熱で炒めていく

そうこうしていると出来上がり、お玉に持ち替え、皿に盛っていく
最後に赤い細いモノを上に乗せて出来上がった

「へい、お待ち!!
チャーハンでございます」

目の前に出て来たチャーハンは見た目は普通だったが、断言できる。
これは美味しい

温かい湯気とともに伝わってくる、美味しいチャーハンの独特の調味料の焦がした香りとネギの香り

そして、レンゲで一口・・・っ！！！

やっぱり美味しい！！！！！！

ご飯のパラパラさ加減、更に具として入っている焼豚と小ぶりの海老も丁度良く火が通っており食感も抜群である

極めつけは、上に乗っているこの赤いモノ
コレと一緒に食べるとこれが生姜だとわかる

生姜の酸味と辛さが、チャーハンも味と風味が更に美味しく変化する。不思議だなぁ～

気が付くと全てを食べており、少し寂しくなる

「美味しかったです！！
あの、一つ聞いてもいいですか？」

「ん？なんだい」

「この赤いモノは何ですか？生姜なのはわかるんですけど・・・」

「ああ、これは『紅生姜』て言うもんだよ」

「『紅生姜』・・・・」

「あのこれｎ「て～～んちょ～う、やってるか～～い？」！！」

酔ったおじさんが入ってきた

「おっさん、また来たのかよ」

店長さんがやれやれと対応していく

「すまんね、何か言ってたようだけど？」

「いえっ！何でもありません

ここにお金置いていきますね、ごちそうさまでした」

と言い、足早にその場から去ってしまった

遠くで「またのお越しをー」と聞こえてくる

宿に着き、布団に入る

「今日も疲れたなぁ・・・・・。

あのチャーハンおいしかった、私の腕もまだまだですね」

「よしっ！決めた！！！！」

私はある決意をし、眠りに落ちた

ＳＩＤＥ　ＥＮＤ

ＳＩＤＥ：軍侍

オレはスキップで宿に帰っていた

それというのも、オレが最初から図面を引き、鍛冶屋のオヤジと話し合いに次ぐ話し合いで遂に完成した【串焼き機】を持っているからだ

この日のために寝る間を惜しんで、タレを作った

そして、例の店で鶏肉や他の部位を手に入れ、気分はサイコーー！！！！

宿に着き、早速試そうとしていると・・・・

「宣ちゃ～ん、お客さんだよ！！！」

ちっ。なんだよ、今からが本場なのに

「店長殿、お忙しいところ失礼します！」

ウチの常連の兵隊さんが玄関にいた

「曹操様から城に来るようにと伝言であります」

「はっ？」

なんだろ？・・・・・っあ！

遂に来たか！！例の褒美が！！！！

兵隊さんに連れられ、城に向かうと・・・

「やっと来たわね、臧覇」

春「遅いぞ、臧覇」

秋「姉者」

「すいません、急に呼び出すんですから
仕度に手間取ってしまって」

「まぁいいわ、着いて来なさい」

そう言うと三人は歩き出した

「ちょっ！待ってください」

慌てて着いていく、何だ？

「妙才さん、どこいくんですか？」

「ついてくれば解るさ」

含み笑いをし、どんどん歩いていく

わけわかんねぇな、おい！

大通りの交差点のある一角で足を止める

「これよ」

曹操さんは建物を指指す

その建物は、作りたての新品で大きなものだった

「何です、これ？」

曹操さんは改まって・・・

「臧覇！

あなたに褒美を取らせるわ！！

褒美はこの建物よ！！いい？此処で店を出しなさい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

「理解出来ないのかしら？

あなたにこの店をあげる。いい？

二日後までに内装の図面を提出しなさい

そのとおりに作ってあげるから」

オレは着いて行けてないが、彼女はどんどん進んでいく

「ちょい待ち！！！」

「なによ？」

「色々といいたい事は在るが、混乱してるから一言・・・・・・マジ？」

「まじ？」

「いやいや、すいません。ホントに？」

「ええ。ほんとよ
あなたはこれだけの事をしたのよ
いいわね？
二人ともいくわよ」

曹操さんは言い終わると踵を返し、来た方向に歩いていく

「よかったな」
と肩にポンッと手を置き、妙才さんは行く

「華淋さまに感謝しろよ」
とまるで自分の手柄のように胸を張っていく元譲さん

曹操さん、幾らなんでもやりすぎじゃぁ御座いませんか？

オレは今、引いてますよ？　ドン引きです

どうしよう？

**幾らなんでも、それは無い！！（後書き）**

反省会

遂に主人公が一国一城の主になりました

さてさて、どうなるんでしょうか？

今回のメイン料理は【チャーハン】です

自分個人の意見として、チャーハンや焼き飯の美味くない店はあんまり期待できないというのがあります

あくまで個人的な意見なので怒らないでください

スイマセン、スイマセン

でわ、次回１０話でお会いしましょう

御見苦しいとは思いますが、宜しくお願いします

## 修行？考えた事無いなぁ。職人魂ＶＳシナ竹龍　前編

ＳＩＤＥ：軍侍

曹「コレでいいのかしら？」

「はい。二日ほぼ寝ずに考えた結果です・・・・・・どうでしょう？」

曹「よろしい。これなら私が予測していた予算の範囲内になるわ
しかも、自由に描けといったけど無茶な注文して来なかった
あなた、好印象よ」

「はぁ」

曹「では、早速明日から取り掛かるわ
そうね・・・・七日よ」

「はい！？」

曹「七日で完成させるわ
楽しみにしてなさい、宣高（パチッ）」

ウインクしちゃったよこの人

マジか。七日で出来るもんか？内装工事って
建築には明るくないからわかんねぇけど

まぁ、のんびり待つとしますか

昨日は徹夜だったから今日は焼き鳥のタレの改良だけにして、帰って寝るとするか

ァァ〜〜、ん〜

でっかいあくびが出る

「ねみぃ〜」

「店長、おかえり」

「悪いね、牛金さん

昼飯まだだろ？何か作るよ。何がいい？」

「じゃぁ、いつもの“てきとう”で」

「あいよ」

自分が曹操さんのところに言ってる間、店番をして貰っていたこの人は

陳留の城の守衛隊長【牛金】さんで、屋台の一番客になる人

その時は、昇級試験の当日で緊張していた所に例のカツ丼を食べさ

した
次の日に『あのカツ丼なる物のおかげでうかりました～』と言ってくれて、今に至る

「ご馳走様でした」

「あいよ」

「そろそろ時間が故、失礼します
また来ます」

「ありがとうございました～」

帰っていく牛金さん

さぁ～て、仕込みをはじめますか

鳥を適当に捌き、用意していた数種類のタレの中から1つずつ試していく

すべて終わり、模索していると・・・・

「あの・・・」

「ん？
あっ、キミは・・」

「先日は美味しいチャーハンを有難うございました」

「いやいや。喜んでくれてなにより
それで、今日はどうしたの？」

「あの、今日は折り入ってお願いがあってきました」

「オレにかい？」　「はいっ！！」

なにやら顔を赤くし、いささか緊張気味の様である

・・・・・もしかして、告白か！！？

「わ、わわ、わたしを・・・・・

「わたしを弟子にして下さい！！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？

「・・・・・何て？」

「弟子にして下さい」

「オレの弟子に、キミが？」

一旦自分を指差し、次に女の子を指す

「はい！！」

次の日・・・

「いらしゃいませーー」

料理しているオレの横で元気良く客に挨拶し、誘導していく女の子

「師匠！ぼぅーっとしないで下さい
酢豚と汁物、飯が2が入ります」

「は、はい、よろこんでー！！」

おかしいだろ！？何で、何で此処にいるんだよ

あの、あの【悪来・典韋】がーーーーー！！！！！！！！！！！

回想ターン

「わたしは、姓は典　名は韋　です
店長さんの料理に感銘を受けました！！
わたしも料理には自信がありましたが、店長さんのチャーハンを食べて自分はまだまだと感じました
だから、お願いします！！
わたしを弟子にして下さい、お願いします」

ターンエンド

結局、上目遣いの涙目＋ものすごい熱意＝白旗で降参でぇーーい

しかしだ、今考えてみるといいかも知れない
店を持つ＝人手がいる
ということは、人員が確保された事になる

さらに、この子自身も料理が上手いので厨房も任せられるので、オレが考えている事が出来る

よぉーーし、早速行動あるべし

「流琉、片付け終わった？」

「はい、師匠」

「帰るか～。それと、流琉？」

「なんですか？」

「師匠ってやめねぇ～
なんだか、体が痒くなる感じがするからよ～」

「でも、弟子入りしたのですからちゃんとしないと思いまして」

「それでもだ」

「でしたら『兄様』はいけないでしょうか？」

「兄様？なんで？」

「あの、その、憧れだったんです
兄がいる、そのようなことに」

ブフッ！！（鼻血が出ました）

「に、兄様！！？」

「イヤッ！なんでもない！！

そんなことよりもだ、それでいこう！！」

片手で鼻を押さえて、もう一方の手で親指を立てて“ＧＯＯＤ”

愛いヤツのよぉ～

そして、次の日・・・・それは突然だった

ＳＩＤＥ：？？？

「曹操殿もありか。しかし・・・」

私は一息つき、そう考える
しかし、あの空気には中々どうして入っていける勇気が無いな
百合百合しいのは勘弁だな

「もう日が傾いてきたな
そろそろ、宿に戻るか」

そう思い宿に戻ろうとし、大通り出ると、なにやら美味しそうな臭いがしてくる
その臭いの方に目をやると、一見の屋台が目に入る
兵隊や民が楽しそうに飲み、食いをしている

「面白そうだ」そう呟き、屋台の方へ足を向けた

「いらっしゃいませ！！何名様ですか？」

「一人だ」

「一名様でーす」

「いらっしゃいませー！！」

少女が言うと、火元の前にいる男が答える

頭に黒い布を巻き、服は白で統一し、一心不乱に鍋を振っている

「何にしましょう？」

品書きを見ると、そして少女が説明してくれる。なるほど、ますます面白い店だ

「とりあえず、酒をたのむ」

「冷と温がありますけど、どちらになさいます？」

これまた解らず、尋ねると答えが返ってくる

「では、温で頼む」

「はい！酒の温、一丁！！」

「はい、よろこんでー！！」

「お通しになります、どうぞ」

質問をし説明を聞く。本当に面白い店だ

客が少なくなり、私を含め2・3人になったので私はしめたと思い、
ある壺を出す

「この酒にはこのメンマが合うな」
大好物であるメンマ。肴にはもってこいだ

「ねぇちゃん、美味そうだな。少し分けてくれよ」
隣にいた男が聞いてくる、今の私は機嫌がいいので・・・

「一口だけですぞ？」　「おう！」

「うめぇーーー！！！このメンマすげぇ美味い！！！！」

「そうであろう？」
更に機嫌がよくなる、親父殿よ。わかるか？この味が

「あの～、私も1つ宜しいでしょうか？」
定員の少女が聞いてくるので、一掴み皿にとり分ける

そして、少女もまた・・・

「おいしいーー！！
食感といい、風味といい、おいしいです！！！！
兄様！このメンマ食べてみて下さい！！？」

妹なのか？まぁいいが、男もやってくる

「あんまり採られても困りますぞ？」
冗談めかしに言う

「では、一つ・・・・」
男が食べる。目を瞑り、良く噛み、飲み込む

「美味しいですよね？兄様」

「・・・・よく出来てる

よく出来た完成度の高い技術食品ではある」

「そうであｒ「だが、」ん？」

『だが、遊戯の域は出ていない』

なんだと・・この男はなんと言ったのだ?

## 修行？考えた事無いなぁ。職人魂ＶＳシナ竹龍　前編（後書き）

反省会

流琉ちゃんが弟子入りを果たしました

オリキャラも考えましたが、あんまり自信が無い

いづれは出そうと思います

そして、時系列は進みませんが、新たにキャラが出てきました（？？？にした意味あるかなぁ）

そろそろ屋台をやめ、店になってからの話もかんがえなくてはいけません

中々難しい

では、第１１話でお会いしましょう

御見苦しいとは思いますが、宜しくお願いします

因みに最後の台詞は、ジャック・範馬兄さんから頂きました（わかりますよね？）

## 料理作ってるだけですよ？職人魂ＶＳシナ竹龍　後編

ＳＩＤＥ：？？？

「貴公、今何と言った？」

「ん？いや、だから・・

完成度は高い。がしかしだ、これでは遊戯の域は出ていないって言ったんだ」

この男は何を言っているのか？

私には理解できない

「このメンマの何処が不満なのだ！！？？」（ドンッ！！）

机を叩き、男に対し抗議する

「はぁ～、少しまってろ」

そう言うと男は屋台の下に潜り、なにやら探し始める

「あったあった、いい具合に漬かってるかな？」

男は私の前に小さな壺を置き、蓋を開けた

「食べてみな」

中身はメンマだった

「こ、これは！！」

私には解る！このメンマは・・・

私は箸でメンマを一摘みし、口に入れる

「・・・・・・」

自分は今まで何を食べていたのか？自分自身を恨みたくなる

「店主よ、お願いがありまする」

「なんだい？」

「このメンマを売っては下さらぬか？

御頼み申す、この通りで御座います！！

この趙子竜、一生のお願いにございます」

恥も外聞知った事ではない

此処にあるメンマをどうしても手に入れたい

私は切に願う

「・・・・・・無理だな」

「な！何故です！！
金子が足り無いのであれば、この身をしてでm「そうじゃねぇんですよ」では？」

「あなたはこのメンマを認めてくれた
其処まで言うのですからそうなのでしょう
しかし、駄目なんですよ。これでは」

そういうと男は壺をしまい始める

「まだ完成とはいえない。
この程度では、自分の納得したメンマではないんですよ
故に認めてくれた貴方には失礼だが、これは謂わば【失敗作】なんですよ」

私は強い衝撃を受けた
自分は曲がりなりにもメンマのことを知り尽くしていると思っていた
しかし、その私にこれほどの物を出しておきながら、この男はまだ
道半ばだという

店を後にし、宿を取る
酒をちびちびやりながら、考え事をしていた
そして、ある結論に達した

「待っていてくだされ、あのメンマ！！！」

ＳＩＤＥ：軍侍

「兄様、よかったのですか？」

「ん～？なんがだい？」

「あの人、なんだか思いつめて帰りましたよ？」

皿を洗いながら、我が妹：流流が聞いてくる

「しゃ～ねぇだろ、ホントの事なんだし
それによ・・・」

「なんですか？」

「流琉もいやだろ、自分の納得していないものを出すなんて
しかも相手の大好きな物ならなおさらだ」

そう言うと彼女は
「そうですよね」
と一言だけ返事をした

片付けも終わり
「さてと、帰りますか？」

「はい、兄様」

屋台を引こうとしたところ、目の前に人が現れた

「もう終いか？」

「うひょひょひょひょい！！！
あんだよ！？だれだ！って・・・・妙才さんじゃないですか」

「其処まで驚かれるとはな。傷つくぞ？」

「急に現れないで下さいよ、それに声を掛けるタイミングも！！」

「たいみんぐ？」

「なんでもありませんよ！

まったく・・・で、どうしたんですか？」

「例の物が出来た
明日、華淋様が直々に見に行く
お主も着いて来るようにと伝言を頼まれた」

「ってもう！！？
速過ぎじゃぁないですかい？まだ五日しか経ってないですよ」

「余程お主のことを気に入ってるのか、事の他政務よりもそっちを
優先したみたいだな
感謝しろよ？」

そんなんでいいのか、曹操さんよ？

妙才さんは帰っていった

「兄様、例の物とは何ですか？」

「そっか流琉はまだ知らないのか
じゃぁ、明日のお楽しみだな」

「えー！何ですか、それ
教えてくださいよ、兄様！！？」

「まぁまぁ」

と流琉をいじりながら、俺達は宿へ帰っていった

次の日

「遅いわよ、宣高」

春「そうだぞ。たるんでるんじゃないのか！？」

秋「姉者、そういうなよ」

「すいません」

遅刻してしまった。理由？寝坊だよ、寝坊
楽しみで楽しみで寝れなかったんだよ

この時に曹操さんに流琉を紹介し、勧誘されかかったが何とかくい止めた

そして遂に・・

「着いたわ」

「おぁ～～！！！！！」

なんとことでしょう～
つい先日までは何でもなかった空き家が、外観からして立派な佇まいをしている

そして内装は、希望道りでカウンター席、テーブル席、２階は宴会場
奥は倉庫と居住区になっている

「兄様、こ、これはいったい！？」

「流琉よ。もう屋台を引っ張る生活は終わった！！！！

今度からはこの店にて料理を振舞う事になった」

流琉はまだ状況を理解するのに必死で着いて行けてない様だった。

まぁ、無理も無いがな

「開店準備が出来たら、私たちを呼びなさい

お客様第一号になってあげるわ」

「ぜひ！宜しくお願いします！！」

曹操さんが帰った後、俺達は家財道具を揃えて、早速機具の試運転に取り掛かる

注文通りに出来ているので、本当にあの人には頭が上がらない

確認しを終わり、流琉は寝てしまった

今日はビックリさせてしまったからな、色々と疲れたのだろう

「ついに此処まで来たか」

火のついてない煙管を加え、感慨深くしていると

「其処の御仁！！」

「ん？」

振り返ると、昨日の女性が立っていた

「おや？お客さん、どうしたんだい？
あっ、そうだ、今度からは此処でやるから、また来てくださいよ」

「その事はいい、それよりもお主に頼みたい儀が御座います」

「メンマですか？なんべん来ても駄目なものはだm「私を弟子にして下され」・・・・はっ？」

「な、なんだって？」

「わたしは姓は趙　名は雲　字は子竜

店主のメンマ道に惚れました。故に私を弟子にして下され」

今の自分はそうとう間抜け面なんだろうなぁ

どうして、こうなった？

## 料理作ってるだけですよ？職人魂ＶＳシナ竹龍　後編（後書き）

反省会

はい、後悔はしておりません

あっ、うそうそうそうそうそうそうそうそうそう、冗談です

やってまったもんはしゃぁないので、少し路線変更しようと思います

では、次回でお会いしましょう

御見苦しいとは思いますが、宜しくお願いします

## 屋台が店に変わった所でオレはナヴェを振るのみ（前書き）

主人公の店の名前何にしょっかの～

**屋台が店に変わった所でオレはナヴェを振るのみ**

ＳＩＤＥ：軍侍

「主～、ただ今帰りましたぞ～！！」

「おかえり、星。今日はどうだった？」

「春蘭殿は毎度毎度、からかい概かあります
やってて飽きませんな。ハッハッハッハッハ！！」

「そうかい、そいつはよかった
曹操さんはどうだい？」

「仕事模様、戦の才覚等、あやゆる面でのあのお方。
流石と言うべきですな
会うたびに閨に誘われる事はこまりますが・・」

何をやってんだよ、あの人は

「手伝えるか？
もう直ぐしたら流琉の休憩が終わるけど」

「私も少しの休憩後、手伝いましょう」

「悪いな」

最近我がファミリーに加わった趙雲　真名：星は今、家の給仕兼曹操軍の客将として働いて貰っている
というのも・・・・

遡る事彼女が弟子入りを言ってきたとき、自分の槍を捨ててまでオレに弟子入りしたいと言ってきたので、こいつはマズイと思い・・・

「アンタがそれを捨てるの事はこの世の損失になる
なにより、武人の魂である武器を捨てさせる程オレはバカじゃぁねぇからよ
弟子入りは認めよう。ただし・・・

曹操さんとトコの客将として働きに行くこと、帰ってきたらウチを手伝う事

コレが条件だ。どうだね？」

妙才さんがひと手が足りないって、ぼやいてたからな
ここで恩を売っておくのもアリだな、それに趙雲という武人の為にもなる

この発言の直後、二つ返事で承諾し、後日妙才さんに紹介、手続き

と淡々と進み今に至ってる

「兄様遅れました～
あっ、星さん。おかえりなさい」

「うむ、帰ったぞ

流琉、何時になったら『姉様』と呼んでくれる？」

「あ～、いや、その照れくさくて
スイマセン」

「誤る事は無い、徐々に慣れていけばよい」

「二人とも後は任せるぞ、二日後には曹操さん御一行が来るからなちゃんと仕込みを頼むぞ」

「わかってますよ、兄様」　「耳にタコですぞ、主」

家族にそう言うと、俺は自称【研究室】に篭もり、対曹操用に試行錯誤していた

宴会を経て、準備を含めて五日後には開店する

楽しみと緊張が今からもうしている。お泊りに興奮している小学生か！

明日はアソコに行ってみっか

次の日

カランコロンカラン

「大将、いる？」

「いるよ

いなかったら店をあけてねーよ、まったく」

「まぁそう言わず

今日はいい物入ってるかい？」

「はぁ～、来なよ。奥だ」

店長に着いて行く、今回はどんな物があるかな

「昨日手に入った奴だよ

魚だな、色々入ったから視て行ってくれ」

いよいよ恐ろしいなこの店は

なんでこの地に、てかこの時代にいるんだよ

マグロ、それに魚のヒカリモノが

「店長、この魚達、どうやって手に入れたの？」

「この前の亀もどきをくれた奴が漁の最中に捕まえたから、貰ってきた」

そいつを今度紹介してくれ

「これみんな貰うよ、明日また取りに来るから慎重に扱ってくれよ鮮度を落さないでくれ」

「あいよ」

買い物を済まし、帰っていく

明日の献立は決まった

首を洗って待ってろよ、曹孟徳！！！！！

ＳＩＤＥ：店長

彼が手を振って帰っていく

「はぁ～、楽で儲かるバイトって聞いたけど、辛気臭いところで商売って

めんどくせぇーな、何時まで続ければいいんだよ」

魚を持って、奥に歩いていく

ある部屋につき、中に入る

魚の入った桶を大型の業務用冷蔵庫に入れていき、パソコンに電源を入れ、背伸びをし、欠伸をしながらメールを作成していく

「やめよっかな、このバイト」

そう呟き、文を書いていく

宛名：『神様』

## 屋台が店に変わった所でオレはナヴェを振るのみ（後書き）

反省会

最後の場面は、より料理を書きたいので追加しました

でも何でもかんでもってわけではありません

幾ら何でもっていうのは出しません

あんまり本編には関わってはきません

さて次回でとりあえず第一章を終わらそうと思います

できるかな（汗）

御見苦しいとは思いますが、宜しくお願いします

**曹御一行様御案内！！**

ＳＩＤＥ：軍侍

遂にこの日がやって来た

静かな店内にオレ、流琉、星。
この三人が中央に立ち、

「俺たちの新たな門出の最大の敵がもう直ぐやってくる
この日のために色々とやってきた
今日、我々の進化が問われる
気合入れていくぞーー！！！」

「「おー！！！」」

仕込みを始める

汁物・・・・・ＯＫ！、お通し・・・・・ＯＫ！

「流琉、串場はどうだ？」

「季衣の事を考えて、山ほど串打ちをしときましたから大丈夫です！」

「よし！星、そっちはどうだ？」

「酒を方も抜かり無しです、おつまみも良い出来ですな」

そして、一刻した時奴らは現れた

「来たわよ、宣高」

「いらっしゃいませ、席へどうぞ

星、案内を」

「かしこまりました」

今日来たメンバーは孟徳さん、元譲さん、妙才さん、季衣ちゃん、

そして・・・

「おや、文若さん？

一緒にいるという事は、文官になれたのですね！」

「えぇ、あの後で試験を受けてね」

「宣高、桂花は文官じゃないわよ？」

「というと？」

「我が軍の軍師になってもらったの」

「そいつは凄い！！」

イヤ～、コイツはめでたいねぇ、めでたい

「知り合いが出世、気分がイイとノッてきましたよ
本日は腕によりを掛けて御持て成しをさせてもらいます」

「期待してるわ」

元譲さん、季衣ちゃんはよく食べるので流琉に焼き鳥を任せ、ガンガン焼いていく

オレの相手は、孟徳さん、妙才さん、文若さんの三人

「今日は『寿司』をお召し上がりになってもらいます」

「寿司？聞いた事無いわね」

「簡単に言いますと、ご飯の上に魚の切り身を乗せたものです」

「なにそれ、美味しいの？」

そのジト目、辞めてくださいよ？文若さん

「まぁ、お前が作ってくれるのだ、間違いは無いであろう」

妙才さん、わかってらっしゃる！！

「いいわ、もらいましょう

お願いするわ、宣高」

「かしこまりました」

軽く頭を下げ、調理に取り掛かる

まずは、お通しを出す

特性のキムチ。こいつは好き嫌いが分かれるがどうかな？

「この漬物、中々奥が深いわね

酸味、旨味、どれをとっても申し分ないわ

ただ、辛さが少し強いと思うわ

私は辛いのが苦手だからなのかもしれないけどね」

「そうですか、孟徳さんは辛味が苦手っと、覚えときます

でも気に入ってくれたようで何よりです

御二人はどうですか？」

「私もおいしと思うよ」

柔らかな笑みを浮かべて、キムチをつついていく妙才さん

「私は・・・」

文若さんは箸が進まないようだな

「苦手ですか？」

「おいしいとは思うのだけれども、酸味が少しきついは」

「そうですか」

「悪いわね、文句つけて」

「いいえ、私の味覚が絶対という訳では御座いません
お客さんの意見を取り入れて、万人に愛される味にする
これが自分の目指す料理ですから」

「素晴らしいわ
素晴らしい心がけよ、宣高」

「有り難う御座います

でわ、此方が今日のお品書きなります」

品書き：鮪、鯵、平目、鰹、烏賊、蛸、玉子焼・・・・

「どれも聞いた事無いモノばかりだな」

まぁ、そうでしょうな
魚を生で食べる文化じゃないからな、どうかな

「なら、あなたにまかせるわ」

「かしこまりました」

この辺から《三分クッキングのテーマ》がかかります

お題：握り寿司

まずは、酢飯の作り方

寿司酢が無いので、酢、砂糖、塩を混ぜたもので代用する

炊いたご飯に寿司酢もどきを加え、混ぜる
混ぜ終えたら、団扇で扇ぎ、飯を冷やしていく

次に刺身を作っていく

あらかじめ身をブロック型に切っておき、そこから適度な厚みに切り分けていく

ここで・・

「星、お酒を頼む」

「かしこまりました」

星が今日のために選んでおいた酒を出し、場繋ぎをしてもらう
彼女の酒のセンス抜群だ
中々通な酒をチョイスしてくる、尊敬するなぁ
ここでお酒でお口直しをしてもらう

皆さんが堪能している間にドンドン握っていく

右手に適度に酢飯を掴み、中である程度形を作っていく

左手には切り身に山葵をつけ、此処からは素早くいきます

左手の親指で酢飯を軽く押さえ、右手の親指・人差し指・中指で立方物を作る感じで押さえつけ
右手でお寿司をひっくり返します

ひっくり返すのは、縦方向でＯＫです
ひっくり返すと、まだ指で押さえていない部分が左手親指の方に来るので、まだ指で押さえていない部分を左手の親指で押さえてから、左手の人差し指・中指・薬指・小指で立方物の受け皿になるように作ります

ここで切り身と酢飯を密着させないといけないので、右手の人差し指と中指で軽く上から押さえときます

最後に左手で上下を軽く押さえ、右手の親指と人差し指で側面を押さえ、形を整えたら完成です

コレを繰り返し、並べていくとちゃんとした寿司のコースが出来ました

調理ターンＥＮＤ

ＳＩＤＥ：華淋

始まったわね、どのようなモノを出してくれるのかしら

宣高は片手でご飯を掴み、生の魚の身を上に乗せ、素早く且つ的確に形を作っていく

見事としかいえないわね

これほどの職人がいたなんて、この曹孟徳もまだまだということね

それにしてもなぜかしら、彼の真剣な表情を見ていると・・・・・

「／／／／／／／／」

何なのかしらこの感じ・・・・よく視ると少しかっこいいと思ってきたわ

隣を見ると・・

「「／／／／／／／／」」

二人も黙って、彼の所作を見ているようだ

「出来ました、どうぞ」

出てきたものに私は驚きを隠せなかった

木の板の上にある、様々なモノ

色鮮やかとまではいかないものの、なんとなくではあるがキラキラと輝いているように思える

「皆さん、食べるときは切り身に醤油をつけてからどうぞ」

言われたとおりに少し付け、口にする

美味しい・・・

魚の切り身、ご飯が丁度良い冷たさをしていて、最初は生を乗せる事を疑っていたのだが、コレでいいと納得してしまうほど、生の切り身の美味しさが伝わってくる

更に言うとこの鼻を通る様なモノは何かしら？

聞いてみると『山葵』というものらしく、寿司という料理において風味等の役割を果たしているらしい

秋蘭は「すばらしい！特にこの光っているものが美味しい」と普段冷静な彼女が異常な食い付きを見せている

一方、桂花は「もっと作りなさいよ！」と照れ隠しにと悪態をついて要求している

タマゴが気に入った見たいね、「タマゴよ、タマゴ」といってる

本当に底の見えないわ、この男

今から楽しみね

ＳＩＤＥ：軍侍

ある程度食事が済み、駄話をしていると酔った元譲さんが絡んできて、「わちゃちにも、たべちゃせろ～！！」と怒鳴ってきて、斬ら

れそうになったりと色んな事があった

そして、最後に星が締めくくりにとメンマで作ったおつまみが意外と好評で曹操さんにお褒めのお言葉を貰って、酔っていたせいか星が泣き始めるという事件も在りつつ、時間は過ぎていった

そして、夜、店の前で

「今日は本当に充実した食事会だったわ、非常に満足よ
またちょくちょく越さしてもらうわ」

「そうですか、そいつは何よりで」

「あら、言葉使いが違うわよ？」

「あっ、すいません」
つい自が出てしまった、こいつはいけねぇ

「いいわ、あなたの腕に免じて、許してあげる
その言葉使いでいいわよ」

なんだか許してもらえました、いいのかねぇ

「それとあなたに真名を許すわ、『華淋』よ
それと呼び捨てで結構よ」

「いいのかい？そんなんで」

「それほどあなたのうでに惚れてるって事よ」（パチッ）
またウインクしたよこの子
「そうか、ならオレも
真名は『軍侍』だ、よろしく」
といい、手を差し出すと「ええ」と握り返してもらえた

そして、宴会から二日後

店の前に水を撒き、のれんを出し呼び込みを始める

「「「いらっしゃーい、いらっしゃーい！！
本日から開店しました、いかがですか？」」」

と流琉、星と一緒に呼び込みをする
そろそろあいつ等をよぼうかな？人手もいるしな

さてと、こっからが本番！！！

オレの料理が何処までこの世界で通用するか

やーーーってやるぜ！！！！！

## 曹御一行様御案内！！　（後書き）

反省会

今回で第一部が終ります

ただ今、二部とオリキャラを製作中です

今回のメインメニューは【寿司】です

握り方は自分の経験と人の意見と情報を掻き集めて、字面にしてみました

どうですかね？わかりますか？

もっとわかりやすく書きたかったんですが、なかなか難しく、これが精一杯でした

スイマセン

では、次回第二部でお会いしましょう

御見苦しいとは思いますが、宜しくお願いします

## 新しい一歩、そして、いきなり暗雲！？

ＳＩＤＥ：軍侍

黄巾もいなくなり、幾許の日が過ぎた
噂によると華琳達が、首魁：張兄弟を倒した聞く。やるねぇ、奴さんもたいしたもんだ

華琳から店を貰い、客足は上々、そろそろ人手が足りなくなってきている
何か策を講じなければ・・・・

煙管を咥えつつ（流琉に注意されたので吹かしてはいない）、思案する

「ん～～、どうしようかねぇ」

「兄様！ぼぉっ～としてないで手を動かしてください！！！」

「あいよ」
あせあせと妹が彼方此方の卓へと料理を運んで行く、昼のかき入れ時だ、俺のフォローでも精一杯だ

「主～！只今帰りましたぞ！！」

「ああ。星、流琉を手伝ってくれ」

「まかされた。チャーハン二、汁物二、漬物一のお客様は何処かー

！？」

「おう！ねぇーちゃん、こっちだぜ」

「お待たせしました、ごゆっくりどうぞ！！」

星も接客業に慣れてきたようだな。しかし、彼女は客将ではあるが武官なわけでいつまでも武と接客を掛け持ちさせる訳には行かない

本気でかんがえねばなぁ

夕方前ごろ、夜の仕込みを始める

漬物・・ＯＫ、しるもの（今日は豚汁）・・・ＯＫ

ディナータイムが始まる

ものの三十分足らずで満員になる。いい！実に良いことだ！！

厨房は流琉に任せ、フロアーには星。今日は何とか回せそうだな

俺は鉄板焼きゾーンに陣取り、注文の品を焼いていく

今日は良い豚が手に入ったので、メインのポークステーキを中心に色々な野菜を炒めていく

「おい、聞いたか？洛陽の事」

「都が何だってんだ？」

「董卓の事だよ、董卓」

「そのことか。賄賂じゃなんじゃってひでぇことしているそうじゃねぇか。」

「なんでも物の流れも悪くなっているらしくてよ、特に商人たちはよ出入りを制限されてるみたいなんだよ」

「んなことになってんのか、たいへんだわ、そりゃ。大将、酒の温をおかわり」

「あいよ」

董卓・洛陽・とくれば・・・・

「連合・・・（ボソっ）」

俺はそう呟くが鉄板の焼く音、客の声のなかに消えていった

それかさらに数日後の深夜、華琳が一人でやってきた

「めずらしいな。　今日はどういったことかね？」

華「明日、洛陽に向けて出陣するわ。だから戦勝を祈願しにきたの」

「反董卓連合ですかい？」

華「・・・・よくわかったはね、どこでそれを？」

「飯屋なんて所は噂の集まるとこだからな」

華「そう」

「で、実際どうなんだ。董卓ってやつは？」

ピクッ

今、明らかに動いたよな。眉が・・・・ＯＫ聞かないほうが良いみたいだな

「まぁ、町の飯屋のたわごとだ。ながしてくれてもかまわないさ」

そういうと、彼女の前に酒とお通しを出す

華「わからなの」

「というと？」

華「向こうの軍師の策なのかしら、正体が全くつかめないのよ。あの桂花ださえね」

こいつは驚いた。あの猫耳フードをも欺く隠蔽術
スゲェー奴もいたもんだな

「そういやぁーよ、華琳さん。モノは相談なんだが・・・・・」

彼女は帰り際には、不敵な笑みを浮かべて帰っていった

店を閉め、外に出る
煙管を咥え、歩き始める。そう目的の場所へと

「おやっさん、きたぜ」

「きたかね」

「どうだ調子は？」

「かんぺきだな、ワシに掛かればこんなもの造作もない」

目の前には目的のブツがある、見たい、早く見たい！

「まぁ、焦るな。ほれっ“バサッ”、どうだ？」

布の下から出てきたのもは・・・・・

「完璧だ、確かに完璧だ！！」

勘定を払い、ブツを受け取る

俺は今、喜びを覚えている
それはとある計画を実行に移す事ができる事、そしてその準備がたった今整った事に対するものだ

俺は俺の目標の達成のため、その第一歩を踏み出す事にした

## 新しい一歩、そして、いきなり暗雲！？（後書き）

反省会

先ずは謝罪を・・・すいませんでした

リアルが忙しくて、とてもとてもかいている余裕がありませんでした

本当に申し訳ありませんでした

これからは少し余裕が出てきたので、ちょっとづつではございますが投稿して行こうと思います

御見苦しいとは思いますが、よろしくおねがいします

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0022u/

夢はでっかく全国展開、かなぁ

2012年1月5日22時53分発行